2012 年 3 月 15 日放送

「第 41 回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会の話題」

山梨大学大学院　皮膚科
教授　島田　眞路

はじめに

2011 年 7 月 16 日、17 日に、第 41 回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会・学術大会が甲府市で開催されました。先の東日本大震災における甚大な被害による大変な年にも関わらず、700 名近い多数の方々のご参加をいただき、盛会のうちに無事終了することができました。ご参加いただきました皆様には、川村龍吉事務局長ともども心より御礼申し上げます。

日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会は、2007 年 4 月 1 日に日本皮膚アレルギー学会と日本接触皮膚炎学会が合併し、同年 12 月に、合併後初めての第 37 回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会が藤田保健衛生大学教授　松永佳世子初代理事長のもと名古屋市で開催されました。その後今回の甲府での開催は、両学会が合併してから 5 回目となります。

「風林火山」をテーマに

今回の学会のメインテーマは“皮膚アレルギー風林火山”でした。ご存じの通り、「風林火山」とは、山梨の最強の戦国武将、武田信玄の言葉で、“疾（と）きこと風の如し、徐（しず）かなること林の如し、侵略すること火の如し、動かざること山の如し”からとったものです。戦さの極意を表したものとされていますが、アレルギーに対する戦さ（戦略）とも相通ずるということで、テーマとして掲げました。会長挨拶では「風林火山の心意気で、ともにアレルギー疾患と戦っていきましょう」とお話ししました。本学会は、２つの特別講演と４つのシンポジウム、14 のセミナーに加え、127 題の一般演題などから構成され、会場では活発な討

論が行われました。「風林火山」の学会テーマにふさわしく、アレルギー疾患の克服に向けた基礎研究に関する講演が多かったことが本学会の特色かと思います。私は基礎研究が必ず臨床応用につながるとの信念のもと研究を重視してきました。近頃基礎研究よりも臨床との風潮が余りにも強く、研究の重要性を再確認したいという思いが強くありました。

特別講演では、「自然免疫；病原体認識と炎症応答」と題して大阪大学免疫学フロンティア研究センター拠点長（同生体防御研究部門自然免疫学分野教授）の審良静男先生に Toll-like receptor (TLR)による病原体認識機構や RNA ヘリケース（RIG-I, MDA-5）による<ウイルス由来 RNA 認識機構>と<免疫応答>などを中心に、先生の最新のデータについてお話しいただきました。昨年のノーベル医学生理学賞の対象にもなった“自然免疫” 分野のまさに先端を体感させていただきました。会場からの大喝采を浴びられたのが印象的でした。審良先生には 2003 年マイアミでの第 4 回国際研究皮膚科学会（日本側会長　愛媛大学　橋本公二：事務局長　私）でも特別講演をお願いしましたし、山梨ウイルス研究会にも来ていただいたり、皮膚科学会全体にも大いにご貢献いただいております。今年のノーベル賞はまさに先生が受賞されるべきであったと残念でなりません。また、兵庫医科大学学長（同免疫学医動物学講座）の中西憲司先生には、アレルギー反応における好酸球の新たな役割やスーパーTh1 によるアレルギー炎症の誘導、アレルギー反応における IL-18 と IL-33 の役割など、今後アレルギー治療への応用が期待される最新の知見をお話しいただきました。中西先生は三重大学の水谷仁先生と共同でアトピー性皮膚炎の発症メカニズムに関する新たな知見を続々と発表されています。留学先のＮＩＨで知己を得、また、私が主催させていただいた 2008 年京都での第 5 回国際研究皮膚科学会でもご講演をいただいたり、公私共に親しくさせていただいております。学長になられてご多忙な中、甲府までご足労下さり感謝しております。

シンポジウムとしては、松永佳世子先生よりパッチテスト試薬 2011 共同研究の中間報告をしていただきました。加えて３つのテーマ、アレルギー性接触皮膚炎、アトピー性皮膚炎、薬疹を取り上げました。アレルギー性接触皮膚炎は、私の生涯の研究テーマでもありますが、この分野で最近最も活躍されている３先生にお話いただきました。京

都大学の椛島健治先生は日本免疫学会奨励賞を受賞されるなどご活躍ですが、今回はT細胞の皮膚からリンパ節への逆循環、ランゲルハンス細胞 LC の役割、また LC や T 細胞の皮膚での動きを３Dイメージング技術を駆使して美しいプレゼンをされました。金沢大学の藤本学先生は Treg ならぬ Breg、すなわち制御性Ｂ細胞の本症での役割について話されました。私のアメリカ留学先の恩師である Steve Katz 博士も 1970 年代、制御性Ｂ細胞の研究をされていました。永らくこの研究は地下に眠ってしまっていたのですが藤本先生らにより新たな展開をみせています。今後の発展を祈りたいと思います。また東京大学医科学研究所の中江進先生は本症での IL-17 の役割を解明された新進気鋭の研究者です。Th17 の乾癬での重要性は解明されてきましたがアレルギー性接触皮膚炎での意義は今後の課題と思われます。NHK のテレビ番組「あさイチ」が取材に来たアトピー性皮膚炎のシンポジウムでは、最近話題の「フィラグリン遺伝子変異と皮膚バリア障害」について慶応義塾大学　天谷雅行先生と名古屋大学　秋山真志先生にご講演いただきました。翌月の放送では、両先生のご講演とその後のインタビューも交えて、アトピー性皮膚炎における皮膚バリア障害の重要性についてわかりやすく紹介されていましたが、まさにこのテーマが一般の方々にとっても興味深いものであったことが実感されました。本学会の“名物”になりつつあるシンポジウムの「薬疹本音トーク」では、ともすれば杏林大学の塩原哲夫先生の独壇場となってしまうのですが、今回は、当教室の原田和俊先生をはじめ若い先生方がまさに“本音”で活発に議論され、予定時間を大幅に超過するほど熱気あふれるものとなりました。(DIHS の本態が Immune Reconstruction Syndrome　IRS ですべて説明できるのかどうか今後の重要な課題と思います。)一般演題も 127 題、すばらしいご演題を多数いただき大変感謝しております。なかでも“お茶のしずく石鹸”による加水分解小麦アレルギーは土曜の朝イチのセッションでしたが満席となりました。５題連続で発表され、活発なご討論をいただきました。大きな社会問題ともなったので皆様のご関心も深かったものと考えます。

<u>ワインと鶏もつ煮</u>

　懇親会では、大会実行委員長の柴垣直孝准教授がサントリーの最高級ワイン「登美」や「桔梗が原メルロー」、「穂坂三之蔵ルージュ」、「グレイスシャルドネ」など、いずれも山梨を代表するワインを数多く準備して、多くの方に楽しんでいただきました。柴垣准教授は 2009 年９月の日本皮膚科学会東部支部学術大会でもワイン通を発揮しましたが、今回も見事なセレクションでした。また、昨年 B 級ご当地グルメとして B-1 ゴールドグランプリを受賞した「甲府とりもつ煮」も大変好評でした。当大学オーケストラ部の演奏を聴きながら、ワインと鶏もつ、そして丁度最盛期を迎えておりました山梨名産のぶどうで山梨らしさを皆さんに感じていただけたと思っております。

おわりに

今年より新たにご就任された和歌山県立医大　古川福実理事長ならびに大阪大学片山一朗副理事長をはじめとする理事の先生方のご協力なしには、会を成し得なかったであろうと思っております。ありがとうございました。また学会会員の多くの皆様にもご協力をいただき、大盛会のうちに学会を終了することができました。この場をお借りしまして、御礼を申し上げ、第４１回　日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会・学術大会のご報告とさせていただきます。

写真１　学会ポスター

写真２　審良静男先生のご講演（座長：島田眞路学会長）